



「ダイヤモンドより平和がほしい」

加計塚小学校 六年二組 落合 康

「康くんは世界で一番可哀想な小学生ね。」夏休み中、朝から晩まで塾で勉強する僕を哀れんで祖母が言った。僕も「日本の小学生は本当に悲惨だな。」と自分の境遇を可哀想に思った。しかし、この本を読んで、僕の考えがいかに甘かったかを思い知らされた。アフリカのシエラレオネでは、僕と同じ年頃の少年達が、突然誘拐されて兵士として戦闘の最前線に送り込まれているのだ。そして大人の命令に従って村を襲い、家を焼き払い、人々の手足を切り落とす。家族も自由も奪われた少年達が、来る日も来る日も残酷な行為を強要されているのだ。想像も出来ない辛い境遇に、僕はしばらく震えが止まらなかった。そして戦争というものが、いかに残忍で不幸な事であるかを強く感じた。

戦争は多くの命を奪い、人々の生活を破壊してしまう恐ろしいものだ。そして戦争の最大の罪は、消える事の無い深い傷を人々の心に残す事だと、この本を読んで知った。少年兵に手足を切り落とされた人々の痛みや苦しみは決していややされない。「朝起きると、おれはどうしても切られた右腕を見てしまう。だから彼らのした事を絶対に忘れない。」と被害者は言った。このような少年兵に対する憎しみが差別にかわり、

多くの元少年兵が社会から排除されてストリートチルドレンとなつている。また元少年兵達も、罪のない多くの人々を傷つけたという、どうしようもない重荷を背負って生きているのだ。元少年兵のムリアは、「たった一度でも、人を殺したら、そのことは消えないよ。」と心の痛みを語っている。さらに少年達は、戦争中に使っていた麻薬の中毒症状にも苦しめられた。このように社会からも排除され、後遺症にも苦しめられた少年達は、普通の生活に戻れずに新たな戦争を起こして行く。戦争は、たとえ戦いが終わっても、その後もずっと人々を苦しめ続けるのだ。

シエラレオネのために僕に何ができるのだろうか。残念ながら遠い日本から子供の僕ができる事はあまりない。今は自分の境遇に感謝して、一生懸命勉強するしかない。ムリアは少年兵だった時、自分のために時間を使う事が全く許されなかった。それに比べ、日本の子供たちは毎日学校に通い、勉強にスポーツに芸術に、好きなだけ打ち込めるのだ。自分のためにいくらでも時間を使える事は、とんでもなく恵まれているのだ。シエラレオネには国連や国境なき医師団など、多くの団体が傷ついた人々を助ける活動を行っている。僕も将来、こんな仕事ができるように、恵まれた環境を無駄にせず、精一杯勉強しようと思う。